

機関番号：32606

研究種目：基盤研究C

研究期間：2008～2010

課題番号：20520302

研究課題名（和文）「強制された旅 - 第二次大戦中のアジアへの亡命 - についての文化人類学的視点からの研究」

研究課題名（英文）Cultural Anthropological Aspects of Forced Travels: The Example of Exile in Asia During World War Two

研究代表者 Pekar Thomas (学習院大学・文学部・教授)

研究者番号：70337905

研究成果の概要（和文）：亡命をめぐる文化人類学的要素（ホームシック、故郷の文化と移住地の文化の差異による葛藤、新しい文化への結びつき等）は異なる分野の亡命テキスト（哲学、文化、文学等）に見られることが明らかになった。これらのテキストを「亡命の文化テキスト」と定義することが可能であり、亡命文学、移住文学、旅行文学に共通するカテゴリーを定義することができる。このカテゴリーは、文学研究および文化人類学の分野で「超域文化テキスト」と定義されている。この「超域文化テキスト」という手法上の概念は第一の成果である。

さらに、異文化交流の観点から亡命概念を考察することにより、日本における亡命理解の背景が明らかにされた。日本文化においては、ユダヤやキリスト教文化をベースとする「亡命」の概念が根付いておらず、日本において「亡命」は「追放」の意味合いを持つものとして捉えられていた。ドイツと日本という異なる文化における「亡命」概念の差異の分析は第二の成果である。

第三の重要な成果として、様々な文書館および図書館での資料収集、学会の開催（研究発表は出版予定）により、第二次世界大戦中の日本および日本占領地を含む、東アジアへの亡命の全体像が明らかになった点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：It could be demonstrated that the cultural anthropological factors (like, e.g. homesickness, cultural conflicts between culture of origin and culture of arrival, attempts of a connection of these cultures) could be found in exile texts of different genres (e.g. philosophical, cultural and literary texts). Therefore, these texts can be named as 'cultural text of exile'. It is, however, possible to consider generally to create a common classification for texts of exile, migration and travel. Such classification in the area of literary studies and cultural studies can be called 'transcultural text'. The creation of this operational term of 'transcultural text' is the first important result of the research project.

On the other hand the term of exile was analyzed in the context of interculturality, in particular the Japanese understanding of exile. It became clear that the western concept of 'exile' (with its jewish-christian roots) has no equivalent in the Japanese culture. What corresponds approximately to 'exile' in Japan is 'banishment'. This cultural anthropological extension and intercultural differentiation of the term of 'exile' is the second important result of the project.

Through detailed study of sources in different archives and libraries and an academic conference, which a publication will follow, the research gap in regard of a coherent presentation of the East Asian exile within the range of Japanese power during the Second World War could be closed. This coherent presentation of the East Asian exile is the third important result of the research project.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学除く)

キーワード：書誌学・文献学

1. 研究開始当初の背景

本プロジェクトでは、強制された旅という観点から文化人類学的アプローチを試みた。本アプローチ方法で、第二次世界大戦中のアジアへの亡命研究を進める必要性として、以下の3点を背景として挙げる事ができる。

- (1) 亡命研究は今日、「グローバル化」というテーマと関連付けられ、他者や異文化との出会い、「旅」や「移住」という観点から論じられるようになってきている。「グローバル移住史 (Global Migration History)」は新しいテーマ領域となっており、本プロジェクトも、特に異文化交流という点に着目しながら、「グローバル移住史」の文脈で研究を進める必要がある。
- (2) 今日の亡命研究において、亡命を「人間の条件 (conditio humana)」と関連付けて捉える文化人類学的な概念が用いられている。この概念では、亡命は、それぞれの文化によって異なる意義、現象を伴うものと考えられ、文学テキストから分析することができる。この概念は、ナチス時代の政治的亡命、ユダヤ人亡命を他の例と厳密に区別する必要を要するが、特定の時代に限定されたこれまでの亡命研究に対して、異文化交流の視点から、新しい切り口を与えることができる。
- (3) これまで、第二次世界大戦中のアジアにおける、ユダヤ人亡命、政治的亡命に関する研究、特に、日本および日本占領地への亡命に関する研究は十分に進められておらず、研究の発展が求められる。ヨーロッパからの亡命者がどのように日本を受容していたのか、亡命知識人が書き残したテキストを文化人類学的に研究する意義が認められる。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、以下の3点が本プロ

ジェクトの主要な目的であった。

- (1) まず、アクチュアルなテーマである「グローバル移住」という観点からの研究が可能であるか、「グローバル移住」とは何であり、どのように亡命研究に関連付けることができるのか考察する。
- (2) 文学研究の分野における、これまでの伝統的な亡命研究と、本プロジェクトで試みる文化人類学的なアプローチの違いを明らかにし、「西洋」と「日本」における亡命理解の文化的差異について提示する。特に、日本における亡命理解を明らかにすることは、日本へのユダヤ人亡命者に対する、日本政府および日本人の具体的な対応を分析する上で重要である。
- (3) 日本語で発表されている研究も踏まえ、第二次世界大戦中の日本および日本占領地への亡命の全体像を明らかにする。

3. 研究の方法

以上の目的に達するため、以下の研究方法を用いた。

- (1) 「グローバル移住」を「亡命」の概念との関連で捉えるため、テキストを文化として捉える文化人類学的手法を用い、ホームシック、新たな文化との対峙、言語危機などの亡命をめぐる問題をテキストから分析する。亡命文学は自己や異文化をめぐる文化的経験の表現形態として考察することができる。
- (2) この文化学的、文化人類学的な研究方法は、異文化交流研究の手法と関連しており、異なる文化における亡命理解の差異の分析が可能となる。この手法により、ドイツの先行研究において「帰郷」と結び付けて論じられてきた「亡命」概念とは異なる視点を獲得することができる。「帰郷」と結びつけられた概念では、「亡命」

に伴う経験、すなわち、受容や反発、避難、同化、順応、拒絶などの経験が十分に研究対象とされてこなかった。まさに、このような「亡命」をめぐる経験が、「移住」に伴っている。

- (3) 「亡命」の歴史的コンテクストを理解するために、文書館での資料収集も行なわれた。資料収集を通し、個々の具体的な事例が明らかにされた。

4. 研究成果

- (1) 文化人類学的なアプローチによる移住研究の基本的特質について考察した。すなわち、ホームシック、故郷の文化と移住地の文化の差異による葛藤、新しい文化への結びつき（ハイブリッド性など）、異文化や差異への拒絶、移住に伴うトラウマの出来事の克服などが亡命経験として挙げられる。文化は「解読可能」であるとする Clifford Geertz の理論に基づき、移住や亡命に伴うこれらの経験を文学テキストから分析する手法を取った。この理論により、ドイツ語で書かれた文章に見られるハイブリッド性を分析することが可能となった。上記の亡命経験は、哲学や文学など様々な分野のテキストに本質的に見られ、「亡命の文化テキスト」を定義付ける可能性が見えてきた。その結果、亡命文学、移住文学、旅行文学を総括するカテゴリーを定義することができ、文化人類学的には、「超域文化テキスト」と呼ぶことができる。この概念は、特定の文化に分類されないハイブリッドな移住経験の形式を定義し、テキストは文化的中間地点として位置づけられる。この文化的中間地点は、文化人類学的な亡命研究 (Ludger Pries) において「超移住 (Transmigration)」と呼ばれ、現代の流浪生活形態と定義されている。「超域文化テキスト」の概念は本プロジェクトの第一の手法的成果である。
- (2) これまでの伝統的な文学研究においては、文化人類学的な移住現象は見過ごされ、移住の文脈を考慮せずにテキストのみが分析されてきた。亡命文学を「超域文化テキスト」として捉える観点から、日本へ亡命した哲学者カール・レーヴィット (1897-1973)、経済学者かつ文化人類学者クルト・ジンガー (1886-1962)、法学者かつ文学者クルト・バオホヴィッツ (1890-1974) の事例を取り上げ、異文化や差異への対応をテキストから分析した。その他の日本への亡命者の事例として、建築家ブルーノ・タウト (1880-1938)、作曲家かつ指揮者クラウス・プリングスハイム (1883-1972)、音楽家エタ・ハリッヒ

- シュナイダー (1897-1986) について、2010 年 9 月に開催されたシンポジウム「東アジアにおける亡命 (1933-1945)」にて報告された。

さらに、異文化交流の観点から亡命概念を考察することにより、政治的亡命者、ユダヤ人亡命者に対する日本人の対応、日本と上海における亡命理解の背景が明らかにされた。特に、日本文化においては、ユダヤやキリスト教文化をベースとする「亡命」の概念が根付いておらず、日本においては「亡命」は「追放」の意味合いを持つものとして捉えられていた。ドイツと日本という異なる文化における「亡命」概念の差異の分析は第二の成果である。

- (3) 様々な文書館および図書館での資料収集、国際シンポジウム「東アジアにおける亡命 (1933-1945)」の開催により、今まで研究が不足していた領域、すなわち、第二次世界大戦中の日本や日本占領地における政治的亡命者、ユダヤ人亡命者をめぐる研究が進められた。特に、Japan Center for Asian Historical Records National Archives of Japan (JACAR) に保管されている、ユダヤ人問題に関する資料のリスト化を行った。これらの資料収集を通し、日本占領下であった傀儡都市の満州、上海、台湾、フィリピンへの亡命が、東アジアへの亡命という一つの枠組みの中で考察されることになり、日本本土への亡命をめぐる問題の理解を深めることになった。その際、1940 年 7 月から 1941 年 9 月まで約 5000 人のユダヤ人亡命者を救済した神戸のユダヤ領事館の資料の重要性が明らかになり、更なる調査が必要である。東アジアへの亡命をめぐる全体像は、本プロジェクトの第三の重要な研究成果である。

- (4) 本プロジェクトの最終的な成果は、国際シンポジウム「東アジアにおける亡命 1933-1945」の開催である。シンポジウムは学習院大学ドイツ語圏文化学科、学習院大学人文科学研究科、ドイツ大使館、Goethe-Institut in Tokyo、DAAD (ドイツ学術交流会)、オーストリア大使館 (オーストリア文化フォーラム) との共催のもと、2010 年 9 月に開催され、ドイツ、オーストリア、アメリカ、上海から亡命研究者 16 名が研究報告を行なった。資料収集とシンポジウムの結果は著書として出版される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① Thomas Pekar, Erfahrungen von Delokalisation und Katabasis in den Literaturen des Exils und der frühen Nachkriegszeit in Deutschland. 学習院大学ドイツ文学会 研究論集, 14号, 2010, p.127-144.
- ② Thomas Pekar, Japan-Rezeptionen der Exilanten Karl Löwith, Kurt Singer und Kurt Bauchwitz. Exilforschung. Ein internationales Jahrbuch 27, 2009, p.57-73.

[学会発表] (計6件)

- ① Thomas Pekar, Japan und die jüdische Emigration (1933-1945): Kulturtexte des Exils, シンポジウム 東アジアにおける亡命(1933-1945), 2010年9月17-18日, 学習院大学
- ② Thomas Pekar, Exil im Quadrat. Transgressive (Selbst-)Übersetzungen in Gedichten von Kurt Bauchwitz. Fifth International and Interdisciplinary Alexander von Humboldt Conference, 2009: Travels Between Europe and the Americas, 2009年7月27-31日, ベルリン/フンボルト大学
- ③ Thomas Pekar, Japan-Rezeptionen der Exilanten Karl Löwith, Kurt Singer und Kurt Bauchwitz, Gesellschaft für Exilforschung, 2009年3月6-8日, ハンブルク
- ④ Thomas Pekar, Japan-Exilanten im Zweiten Weltkrieg als ‚unfreiwillige‘ kulturelle Übersetzer, Internationalen Symposium „Übersetzung – Transformation. Umformungsprozesse in/von Texten, Medien, Kulturen“, 2008年10月18-19日, 早稲田大学
- ⑤ Thomas Pekar, Japan und die jüdische Emigration (1933-1945): Kulturtexte des Exils. Vorstellung eines Forschungsprojekts, 日本独文学会, 2008年10月12-13日, 岡山大学
- ⑥ Thomas Pekar, Jewish Exile in East Asia, and in Particular Japn

(1933-1945), United States Holocaust Memorial Museum, 2008年8月20日, ワシントンDC

[図書] (計2件)

- ① Thomas Pekar, Zwei Japan-Exilanten im Zweiten Weltkrieg als ‚unfreiwillige‘ kulturelle Übersetzer: Karl Löwith und Kurt Singer, In: Hiroshi Yamamoto/Christine Ivanovic (編): Übersetzung – Transformation. Umformungsprozesse in / von Texten, Medien, Kulturen, 2010, p.151-161.
- ② Johannes F. Evelein /Thomas Pekar 共著, Exiles Traveling. Exploring Displacement, Crossing Boundaries in German Exile Arts and Writings 1933-1945, Amsterdam/New York: Rodopi, 2009, p.51-72.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:
○取得状況 (計◇件)
名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~20012491/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

Pekar Thomas (学習院大学・文学部・教授)
研究者番号: 70337905

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号